

婦人科癌治療患者における 六君子湯の有用性の検討

大阪大学大学院 産婦人科学教室 助教 武田 卓

キーワード

- 婦人科癌
- 六君子湯
- 腹部不定愁訴
- SSRI
- 脳腸相関

婦人科癌治療では、放射線治療後の腹部膨満感を伴う腹部不定愁訴、抗癌剤投与による遅延性嘔気・嘔吐、さらには癌告知によるうつ・不安に対する抗うつ薬投与による副作用としての嘔気、嘔吐などの消化器症状をしばしば認める。このような消化器症状には、六君子湯が有効な場合が多く、その成績と患者の精神面まで考慮した全人的医療の重要性について述べる。

はじめに

婦人科癌治療では、放射線治療後の腹部膨満感を伴う腹部不定愁訴や、抗癌剤投与による遅延性嘔気・嘔吐をしばしば認める。さらに癌告知によりうつ・不安といった精神症状を呈し、抗うつ薬であるSSRI (selective serotonin reuptake inhibitor) の投薬を必要とする場合があり、SSRI投薬初期の副作用である嘔気、嘔吐などの消化器症状をしばしば認める。このような消化器症状に対して整腸薬や抗潰瘍薬を用いても満足できる効果が得られないことが多い。われわれは婦人科癌治療中・後の腹部不定愁訴に対して、消化器症状改善効果をもつ六君子湯を投与し、改善効果を認めたので報告する。

婦人科癌放射線治療後の腹部不定愁訴に対する効果

婦人科癌放射線治療では、治療中には腸管の蠕動亢進や腸管粘膜障害から下痢を認めるが、治療終了後では腸管の蠕動低下や通過障害による便秘や腹部膨満感といった症状が問題となる。

婦人科癌放射線治療後患者の腹部不定愁訴に対して、六君子湯投薬前後での治療効果を検討した¹⁾。8項目からなる問診票（腹部膨満感、倦怠感、抑うつ感、食欲、食事の味、便の回数、手足の冷え、胃もたれ感）で自覚症状の重症度を5段階で評価した。

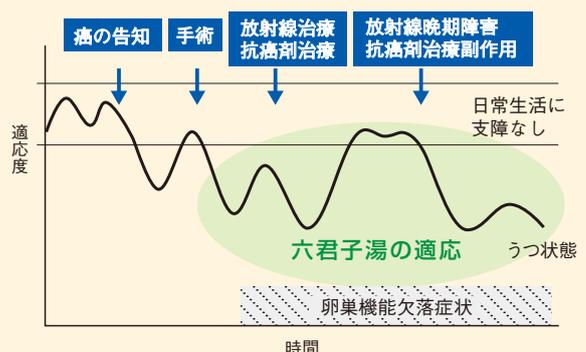
全体的な症状改善としては10例中で著効2例・有効6例・無効2例であった。投薬1ヵ月後の治療効果は、腹部膨満感、便の回数、胃もたれ感、手足の冷えの4項目で有意差をもって改善した。また、

癌患者はうつ状態のハイリスク患者であり、腹部不定愁訴もうつ状態のひとつの症状の可能性があることから、問診票に倦怠感と抑うつ感の評価を加えている。これらについては、今回の検討では有意差は認められなかったが改善傾向を示した。さらに、その後の経過で10例中3例に不安状態が出現しSSRIの投与を必要としたことから、癌患者に対しては治療中から外来まで継続した精神面のフォローの重要性が考えられた。

SSRI投与時の副作用軽減効果

癌患者は、癌や治療に伴うさまざまなストレス（癌告知、手術、再発への不安など）の結果、適応障害やうつといった精神症状を呈する。さらに婦人科癌患者は、癌に伴うストレスに加え卵巣機能欠落症状に伴う精神的苦痛は大きく、治療を必要とする状態に陥りやすい(図1)。

図1 婦人科癌治療患者におけるストレスに対する適応障害度



六君子湯の今後の検討に期待

このような精神症状に対して、SSRI が用いられるが、服薬初期に認める副作用（嘔気・嘔吐）により、服薬を中止せざるを得ない症例もある。現時点で SSRI 投与初期の嘔気・嘔吐に著効を示す薬剤はなく、予防的に制吐薬が処方されることが多い。

われわれは、放射線治療後に精神症状を呈し SSRI を投与した症例に対し、消化器機能調整剤メトクロプラミドの予防的投与群（六君子湯なし 8 例）と、腹部不定愁訴に対し六君子湯を投薬していた症例にメトクロプラミドを追加した群（六君子湯あり 7 例）とを比較検討した²⁾。評価項目は SSRI 投与による嘔気・嘔吐の抑制効果、SSRI 服薬コンプライアンスの改善効果である。

六君子湯なし群で 75% (6/8 例) が嘔気・嘔吐を自覚していたのに対し、六君子湯あり群は全例で自覚症状がなかった。また SSRI 服薬コンプライアンスの面では、六君子湯なし群で 37.5% (3/8 例) が脱落したのに対し、服薬を継続できた症例（六君子湯あり群全例、六君子湯なし群 5 例）については、SSRI による精神症状改善効果が認められた。この検討では、六君子湯が SSRI 投薬の 1 ヶ月以上前から腹部不定愁訴に対し投薬されていたことから、漢方製剤による体質的な改善がみられた可能性も考えられた。

一方、六君子湯が SSRI による嘔気・嘔吐作用に対して直接的抑制作用を示した症例も認められた。子宮体癌術後患者で、不安感・イライラ感・しびれ・胸部圧迫感・腹部膨満感・冷えといった様々な愁訴を有し、神経内科・整形外科・循環器内科を受診し多剤の投薬を受けていたが改善しなかった。この症例に SSRI 投薬を行ったが、嘔気・嘔吐がひどいため内服 3 日目で服薬中断となった。そこで六君子湯を併用したところ SSRI の内服が可能となり、不定愁訴についても改善を認めた。その後、自己判断で SSRI の内服を中断し六君子湯のみの内服を続行したが、気分的にも安定し、不定愁訴の再燃を認めなかった(図 2)。

六君子湯は、人参・白朮・茯苓・半夏・陳皮・大棗・甘草・生姜からなり、主として慢性化した胃腸機能の低下症状に用いる処方である。万病回春・卷之四・補益によると、「脾胃虚弱、飲食少シク、思イ、或イハ久シク瘡痲ヲ患イ、モシクハ内熱ヲ覚エ、或イハ飲食化シ難ク、酢ヲ作シ、虚火ニ属スルヲ治ス。須ラク炮姜ヲ加エテソノ効甚ダ速ナリ。」即ち、「体力が低下した人の胃腸機能や食欲の低下、みぞおちのつかえ、冷え症のみられる人の消化不良や胃痛、食欲不振、嘔吐などを早期に改善する。」と意識される。

六君子湯はこれまでに、消化機能異常による腹部不定愁訴に対し使用され、その有効性が確認されてきた。シスプラチン (CDDP) 投与により惹起された食欲不振ラットに六君子湯を投与することにより、摂食促進ホルモンであるグレリンの血漿中濃度が増加したとの報告もあり³⁾、抗癌剤による悪心・嘔吐、食欲不振などの消化器症状に対しても効果が期待できる。今回詳細は述べないが、われわれの検討でも抗癌剤治療に伴う遅延性の嘔気に対し、改善効果を認めている⁴⁾。婦人科癌治療により、様々な原因での腹部不定愁訴が生じるが、われわれの検討では放射線晩期症状・SSRI 内服による嘔気・抗癌剤治療の遅延性嘔気といった多方面での六君子湯の有効性が考えられた。腹部症状と精神症状との相関関係は強く(脳腸相関)、単なる原疾患に対する治療を考えるだけでなく、患者の精神面までも考慮した全人的医療の面からも、六君子湯の果たす役割は大きいと思われる。

参考文献

- 1) 武田 卓ほか：婦人科癌放射線治療後患者の腹部不定愁訴に対する六君子湯の効果 産婦人科漢方研究のあゆみ 21: 85-89, 2004.
- 2) 武田 卓ほか：六君子湯による SSRI 投薬時の嘔気・嘔吐副作用軽減効果について - 婦人科癌放射線治療後に精神症状を呈した患者での検討 - 産婦人科漢方研究のあゆみ 22: 79-81, 2005.
- 3) 武田宏司：六君子湯のグレリン分泌促進作用について 漢方医学 31(1): 11, 2007.
- 4) 武田 卓ほか：タキサン系抗悪性腫瘍薬を中心とした婦人科癌化学療法に伴う遅延性悪心・嘔吐に対する六君子湯の効果 産婦人科漢方研究のあゆみ 23: 62-64, 2006.

図 2 臨床経過図

